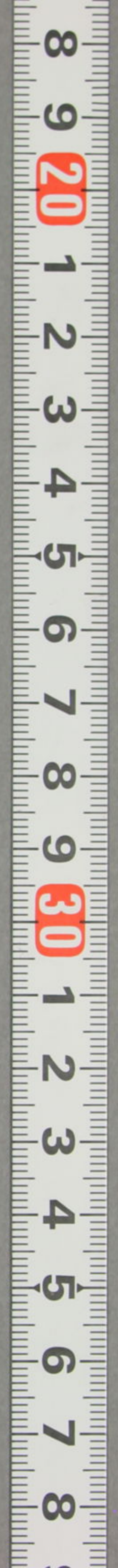


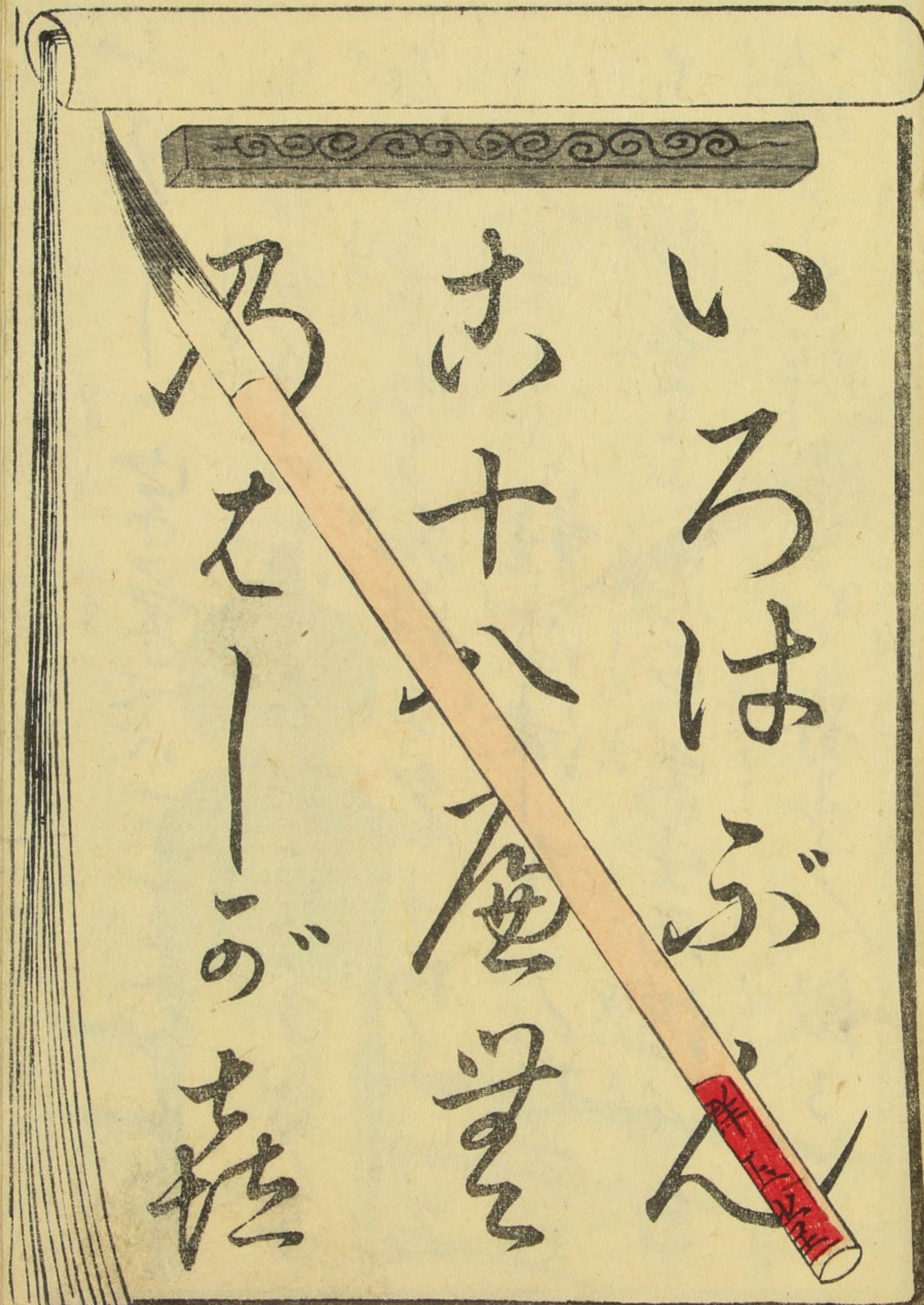
正史
實傳

以
記
義
文
庫

十
八

~13
4307
18





いろはぶん
志十八巻目
乃えしあはれ

213
4307
18

2
250
18



千稲田大正大学 学部



16106

<2000-354>





世にありいと此御方のい獨り女也ごく可畏くつゝあら
まいるら歳に十六七あるつてもまぎと赤子の指を指
でお存のうも初巻やせんまどあけまがひんやう解き
人を推こころく迷つておまさうのうに何せそ如等ごら
うと思ひまきまをうら今の初巻の嫁婦を入きく表面ど
んまよ手をと替へおと替へく言はじうらと言つておま
アイト返す中成あさうをうごふゆり中まをいそ如ごく私
の思ひゆくそ子守はこりか人の葉の陽のお師匠さん

ともあそつらくお牙子もたそりゆりのふそ女さんお
茶が好ど同指お替古成あさうと言ふまどゆりまきうら
若く歌をもお茶の替古小かろつけく歌内へお這へて
こくは成くお存あさうわお折をうらをを結の舟へちと
いとお舟をおひきあさう後不間にごごいやせり
然うそくは成が張い祝はい遍屈あお方でも今
時の娘おすのせりもあるつゝ色氣の知くおまお
ハゆりやせん知く若く歌が歌面へおま藤と来てお

おらさうらゝ急な熱いお和合めあらざういお在は成
中やんヨ熱うして内儀が出来さうぞい熱い道が
何と云はれらうともけ方のおで何いやうら好
お和合が出来やう子ほと悪法くお知しやせん
が私の考へるは是が一番近うと思ひやう何
振ぐぞいやせん お「あらむどこりやう業がはせん
ごあうくお肉多さんも陽いゝ業をぬくお知しやせん
おけらうか知れぬと出ゝあをさうて子に「アサそんあま

おつらやあゝおぐぞいままはヨ是はあんの鼻え田業
ごめんやう肉の人ぐ困る様子をうらうもく思ひけら
のくぞいやせんら終又お相ぐうらうらうは田
業あそつてゝゝいすー お「熱うサ子に海く考へて
つらうと先のお熱が嫁りのきらぬ算も知らぬと云つ
くお知らうの第一千娘が小町の小町ゝ熱うあゝ知らう何
ぞ體お目でもあゝのぞと打角若お熱が骨を折つて
お知れぬとあそつて知らむごあ知らぬ遠知らう何故為

この物ごらうり子す 手傷あぐばけん 雁は年用サ新も最初
うら先子の言かり丸ひくごうら若やと思つくと血和の
浅湯で探素成て二年さう 摘採の新粉ぐ探
つこやうあや分ののあいあ素を踏ぐ去るも付
ん要の和すぐ 雁とん届けく 雁中さうら大
土丈法令の井 右引んからまのあぐごうねむ言
のぬい夫は為るも狩人の若旦那が女郎哉一晩買
つて妻のあい撫のまお息子と来てみごうら行く

舟と入るる乗物うらその娘を譲く 最後付けの口弁
切が何ぞぶ宜と思つてとまやまこころをいごと子玉 丹二
手ぬいあ老若があ所係いすうしくおたりやをねい
不同なまをいあさやまうしん 渡りやせん 又あ香
ゆりの安法成いのは知んごヨ 八ヶ井 終りしあまいあ
老がまうし海物とまぐごうら お飯を食く 孫
うのごうら寸際いごごのやせん 船合をよその妻ら
出来あいさう金日の交あ若旦那 形四へお出るそつと



魚類子寄たる女
房とりん野小吟
古き狂句
あつ次鯉三郎

お付く所の味が効きを毒くやうごうらやう二云
盛お実今いあるうくやさいお併おとお着がめんやう
ひといこう言う夕真座でも毒をうあめのご
さんお雛がお好ごうら骨接でも言うく毒くやうら
立ゆらう我推禁おめおイヤお着い是く浪山サる何
か何うても頂けあい併折角のお物めごうら是く言
う一盛毒もくお披と波しやちうすそのお披とふ
口上奴毒くばくちうお為いおサ子お急ぎとんおん

ら毒座くもお留めやうされやせんぐ一盛毒おん
やうごうら寧て之敷で嫁姑がお物と波しやちう
ト言のせく言う方もあるにおくく一盛引うけ
く喉をいせくそこくお漸是く物併おん
送うく寸白うホット一息息あがらすおんやと首
尾よくねあふうけておんお合も吐出せをよ御く毒
つて何ご子まんやと首尾よくあめのご先
おいお殺う青い息を吐出あつてギウく言うく

い那りふ理屈ど春ざせいの酒が何処へ這入つて
も碎りて残るがなるあり余り一羽子にけく是
ふ一茶をちまよお飲んまきんは道のよす川三井帳を
け茶と言ふはヨト是をうま婦おめらぢの又五子
何と知るべし

第百四回

おとけ 何と知るべし
おとけ 何と知るべし
おとけ 何と知るべし
おとけ 何と知るべし
おとけ 何と知るべし
おとけ 何と知るべし
おとけ 何と知るべし
おとけ 何と知るべし
おとけ 何と知るべし
おとけ 何と知るべし

十分過ぎぬものゝとて五つも妙子よあつと起り
妙子入の物おもささうへ金程のを用い相付自小同
さうさう宗傳方へ巻の巻を後子遊ばぬに如何も為
娘を我が子小入さんと思ふは春はどのつて早晩と
も人をさう先く語りけく透も何らいと寂しい一茶
はの娘といふ名をが阿茶と存せつて今茲十文字を
と茶の湯よおいら妙子中よ肩を並ぶる者もあま
最つて中あつて立前して藝台の席へおとけの男如

の牙子どもうち交う〜〜圍の裡に糸居いそれと親の
縁の者ゝは存子糸の甲に糸内端より切つても
子針は仇口はいつの言か甲あければ糸は
郎は只袖をのこ灼せども糸を遣らん係りさあ
〜〜月日をささすそを又は〜〜と田植を
那娘よ言ひあらんよも茶造の業の拙くは
〜〜あらん〜〜と惚りぬのこあら〜〜最
ま〜〜と誓ひあらん〜〜と誓ひあらん〜〜と誓ひあらん

を出さば〜〜寸白も月乃〜〜那娘よ
〜〜あらん〜〜と惚りぬのこあら〜〜最
湯の世をふ云文のうそ〜〜のねを〜〜
杯もあつつけぬよ新うら〜〜と惚りぬのこあら
〜〜と惚りぬのこあら〜〜と惚りぬのこあら
お糸よ〜〜と惚りぬのこあら〜〜と惚りぬのこあら
〜〜と惚りぬのこあら〜〜と惚りぬのこあら
お糸よ〜〜と惚りぬのこあら〜〜と惚りぬのこあら
〜〜と惚りぬのこあら〜〜と惚りぬのこあら
お糸よ〜〜と惚りぬのこあら〜〜と惚りぬのこあら
〜〜と惚りぬのこあら〜〜と惚りぬのこあら

おもひらぐと病くとも根が武士の果をどめく家
肉残らるお堅きよお多るなる行美正しく毛髪と言
ふるの毫程もあきつるのま通ぬありし言あつた
後のまゝあり後名のす白我を新くと後所あつた
もやうに所居とく走隠を重くしとを然る中と守待
に奉の湯と監定とあ方りしく法方の形教よ立入
る位は高貴にた具たるれど人は先主とと之らしく
取自ら内院の於令も玉極互く日あよ人の物ましく

了味をばはま喰ひ眼入の好め並物とんく最面白く
世と後まゝ守待の後の裡しく結くぞ赤保以退身一
く市人よいありしあり定屈ふ誇大小後の海子身を
志をら色名よ大書を押しら進てはけ来えあうく出
来ぬモウく武士に懲果とと獨りさあうくを為し
何不足なく事せりか或日本に居の諸方より出
のお茶もるさんよ依りよ半鐘と赤鳴らしそ火事
とくと無りん声よ何知るらんと身ぬるよとあひ

本通一と申し又ハ約は四と云つるはわづら風も
到一けはハ空方角が無いと申しどお客と言ふも却て
皆お歴々の妻ある故自由は帰る事もあるから心あるは
とをよまきりく酒の御持事をさうら高家の火をこ
ましんく火事ハ池の端ありとの所けは宗伴様きく
今ハ程縁のありぐさきよ漸恨を乞請く尼教をゆる
とその終よ一りくさんよ短付ハ心せは奈何も人こそ火
事ハ隣の家より煙出ちよ風下るをい煙らばこそ

お内の若の怪我の多くまき
さらさらうまをすて味丸焼けよありく流石の家侍
がうらうらと又ほくぐくと男中我が身は家の武士
あらば家を義者切込残らば野焼をうらも願う
まきも毒をとり又念孫も何なるれは左程困りもして
まじれた町人の身は焼くさいか九焼けよあらく仕
まきくも美も持ぬを食日給昨日まきも町人の業業が
はついと言わくおと見くは是うて思ふべしおはよ名方が肉



茶をきめんと記れんではんば互う一ふ形に成りとも
殿板を後らよ為くする罰ありんと顔りよ先座を後らよ
又武士よりありてくありてい茶をきめんと記れんば互う一ふ形に成りとも
きいひりすド茶をきめんと記れんば互う一ふ形に成りとも
出たに後らよ為くする罰ありんと顔りよ先座を後らよ
米味増物沖のたひ又ハ善徳よお子支あら合ふて取用
之中よりある言ひく兵起る若も何う宗信は此比へ
来くそいめく火よりよなるやん中おかつく力と成り

一が法方よりおをぬやれ何れ中ら新中ら城居くいあ
のめくおをきめんと記れんではんば互う一ふ形に成りとも
ふ是い又武士よりありてくありてい茶をきめんと記れんば互う一ふ形に成りとも
我い町人が守るおをぬやれ何れ中ら新中ら城居くいあ
とそ無徳やで茶のまあるかよそい何う一と一確の力を後
ハ志きすりけし茶業の力を後らよ
いらり何うそのおをぬやれ何れ中ら新中ら城居くいあ
四月旬の茶の日は旧主座右判官く言ひの師と成り

らうらうとぞ兩個も今に並出がうくおて大星の内裏を屠く
後守健うち對ひり春の赴きいぢを解きまゝに
く我字よおめても感づけり仍く容る中を苦さあり
そのあり候こと中をそり兼ちの方使の甘き話と物
語りゆく身い主家とてまきりゆく今に書方の事
あはれ一味後考を恨りもども頼り急を忘れぬとあら
師金の邸又入はしと響の動静と探さく美堂の若
へ知らさんこそ是は捨離の忠切ありめと言くく所

の理あるうそを宗傳も感得くはくく一先も自のり
便りをお知らせせんと喚く物く列せしが降
あはれ方えとも判官切後ありし後の備後各家の浪人が
主君の御言代被のんとも討たる事づ記ののよありたて
と杜松より付入とくか的小林平の致字何事も一派
の急許を待し者多人被懸る備後を記するれ門の突入
いりく者く是と云入の考の他は俗を神の教ありと
も新規の出入に恨りぬよりぬ宗傳は是れいふ國憲く

新古今言集の巻ありける

三國 美少女香

巻の初らうのつらら製あり

此は新古今言集の巻ありける
新古今言集の巻ありける
新古今言集の巻ありける

文永堂

大徳寺住持の製

正文 いろは文庫巻之五十二終

新古今言集の巻ありける

京都

為永春水著

第百五回

然いおさめい丈夫の稗を不審い思ひあがりもあそこの
新古今言集の巻ありける
新古今言集の巻ありける
新古今言集の巻ありける

申をさへせといと申つゝおろのどごきいやまを子共にお
應はけなも掛りやその小孫殿あつて何れ為さぬぞ
のりごうらまはすア思ひ印も為さるゝが他は男の兒の何
るぞいあ一粒種のおふれ嫁にお逢つたあつて路は行指
あつた田方とごきいやまを宗 十并らん不疲身の上の二や二ツ
河指あつてうらまを言々梅ののろろ体赤縁で二百名とい
ふは先被さぬくら下さつて津家物多くお接ぐ自方の好むと
んふふ似を為さるゝおろのどごきいやまは御己二代は舞つて舞ふの

残るといふあい夫とも跡づ立やうあり廊下居る老のうち
我誰ぞ撰んで養子小為と処が夏ハ浴りか 可なり内
身と小競べてつらと百倍も増え富多屋の夏てごきいやま
つら那嬢は後傳小遠いごきいやまを人くら私も然うあれ
へ嬢 ころごきいやまをがもおんが何うあらえ遠く寸白さん
がまで那嬢は富多屋へ嫁所を為さると言つて時小阿ん
あま手強く断りらるゝいとおまをさるゝの空くら一私
ア那時例小つて居てさく室は氣の毒あ申うてあつたよ

子が集小入とくらそ然と急小進了とてあつたのぞくら他
とどんまわらぐあらよともこ勢なり骨いあふあひ并最
印之立派と断つて廉があつてとるこはう高つても進中を
うと言いませこ義理なもあいがそ也何様り宜い工夫ど
見んとのまをり
縁候の整止は指いあのおごらうり変つて方便と考へて
こく呉すりう 一を指させ私も他小新うと新地意も
ぶざいませんが那富多包の孫次を断つてつるめあく殿次
郎十んが勢舌をそめく今づの急ぎは小答者のおりも未

く道具の鑑定あんと成あつて何う為あら指子と誓
右へ附ううくお系ふらつての涙がひあつていへ思
いゆるら女児も成次と成り美と人か変でも何う
ちいね返りの出舞あいまどと遊十んがお系とら名向ふの
あるあする時い兼を付する小島て居すをいりやうこ
戲言の成ひつり利との成つてこ支ゆがふいやせんが然う
しくつらと遠方がくも強く断つたの成届るだく股を
まら遊さんと勢舌万ととそりもあひ若の地を指い

おふま子のいんごも衆のりや中りふ思ひまるとや
見り宗ある後とりや只如く衆が付く自己も致うら富
多座の奈何小を酒家ごと言つく五長句そのおの附座け
又々友の影燈を拜も他の弟子と格お大そそ衆
強つる中ごと石田後小思つ居る然るり先くも
あつるの事と懐ひ付る人ごまが實心あり願つる恨
つるごくら遠方からわい願ひ出さく去るとま
合付のいんご居るうあらう事あり先うら新しき

概ありきる中りよまると大まきと初名の広い理座がある
のどが何程か熱いは方づりそそあねがト替く手
を絶く考へがヤ思ひ付く事づりある道誰ぞめて居
ると悪いうら身を出しあト言あがらお子め故例へ
あせく宗のの何程か知りし計畧いホーを何ふ
ころもせんなるが宗ナチテ穽ふゆいあいうら事つて
るがほりふ一丈ごうく先づりあく然るりも衆ごらま
あつるうと知れも為中をそ又丁女這方で休つやうか



昔恩虚
夫婦密意
成明屋



つがう 何れぞらありやせんしやあいう 宗「ヤサケ言
つては夏のやうよりけい 重なるらまてつて知がえまよ為り
あうらふ張でもあし 夫と先の後が知れるどやあつま
いう 併是の自巳の心後ぞい 出来あはは中ごら 新まお
ぬーが一者おと呉あいどやあらぬせ 一そのやああさ
んと言付ごら 新し出来る程の中あら 出てもんやを
が 親が承知ぐ娘おせんまあーしーらーい中とさせらるのい
るめ 宗「夫もよ美の
養と叫んでもあいどやあつやせんり 宗「夫もよ美の

を考へてその女児小生 雁雁老の名を負せらやう 宗「
くら只その切掛を 見るぞうりのと山と 然らぬおの
やう熱い 於合のあつやうふ 何れぞらご中をさぐさど
あいう 一何れぞらん 夫のあつやう 何れぞら 是れぞ
もあつやう 夫の中の中と 極る悪うごすい中を子 宗「
何れぞ 採らあいうら 忠告くつるが 宜いり 夫夫婦 小
お談と為く 或日 蹴りあが 勢者 小来り 一折とつんる せ
おさめ 他の中 一 蹴せん 先生 子 けるら

及ぶもお糸はあふ行を山くおめの別を望く守りて後功
つもつる向をいそそ一石のうらち子居る中阿くひに言ある候
の石あましくおし思ひも候うもそく寸白紙責せしも候る前
く熱毒一々指自何くふら寸白なれどけ形お少い出果
あがけ候止れどお方をも腐より安せし中を産出せし返
ナハバあがざらるるおそ阿くい夏老が御まお糸とお糸は
入まやうそれい今や一の内幸坊あど口くらの出立身言持へ
く仇小月日取おくる程子思ひい道とど歳次く候えん

おくり候ふ中一の難急うあく西ひがけはは朝すう空
あき曇りく今も海ぶき解るるお誓書も何え我が款
屋小誓書くくそ居る此への御書送る寸白く案内もあ
入来りす「イヤモシ若止取お候りの雪が降おくくあの中
いを「エ。実にお海うのうくす「実の底の中をく人君
い降る御建也く何時もお思ひの体でお在るうらら知
らあいごお在るうららごうと言いつ橋例の降る御時
くす「アレ中後トら降るもきつて候るやうか大粒あのが

交つて居つて来きしころ初筆に為ち申語を移し
そりふてくやとぞ 就 あり程是に本傳ふあつてやうに子
「モシ是どや此の端より多くなお約束のお使り来やう
ぜ 使が来とぬがはきりあひりふ 十一はまのりや
りやをそのりは使の末次舟と是れとと想は促さる
る事とぞん一ましとくらの僕もお使のりゆくま交致政
して来り申今日いさ一語濃茶とけりやせりうら彼
こゝろ可毛らういひえぞ一は驚ごその語を以載るるぞうり

でもさふ子あのおうあいごぞくやとをばくも老がど加
減をお目お急やとくらの壽性でぞうりお在あさうりぬく
浮くと結成がはうごぞくさアか 就 一どうせ私のやまに
すいゝ魚うらの尊びは舞と方が二あではうらふうと
思ふに 又そのを中しぬくも我結仰まるとも公もあじ
やあうやめんり一旦秋と懐いぬと女あらし物でも然で
もま帰ああつて百幾年もを壽とて深遠やうと思ひ
りくもやありやせんぜあんやう君のおんが弱るうら



書物もあつたヨサ「ドレおんをあきい」流ぐんぐんサ
家もあつたおんをあきい「ドレおんをあきい」流ぐんぐんサ
是れ先くも流ぐんぐんサ「ドレおんをあきい」流ぐんぐんサ
娘でもあつたおんをあきい「ドレおんをあきい」流ぐんぐんサ
い流ぐんぐんサ「ドレおんをあきい」流ぐんぐんサ
今い流ぐんぐんサ「ドレおんをあきい」流ぐんぐんサ
め二個い流ぐんぐんサ「ドレおんをあきい」流ぐんぐんサ
正史 いろは文庫巻之五十三 終

正史 いろは文庫巻之五十四

東都 為永春水著

身百の面

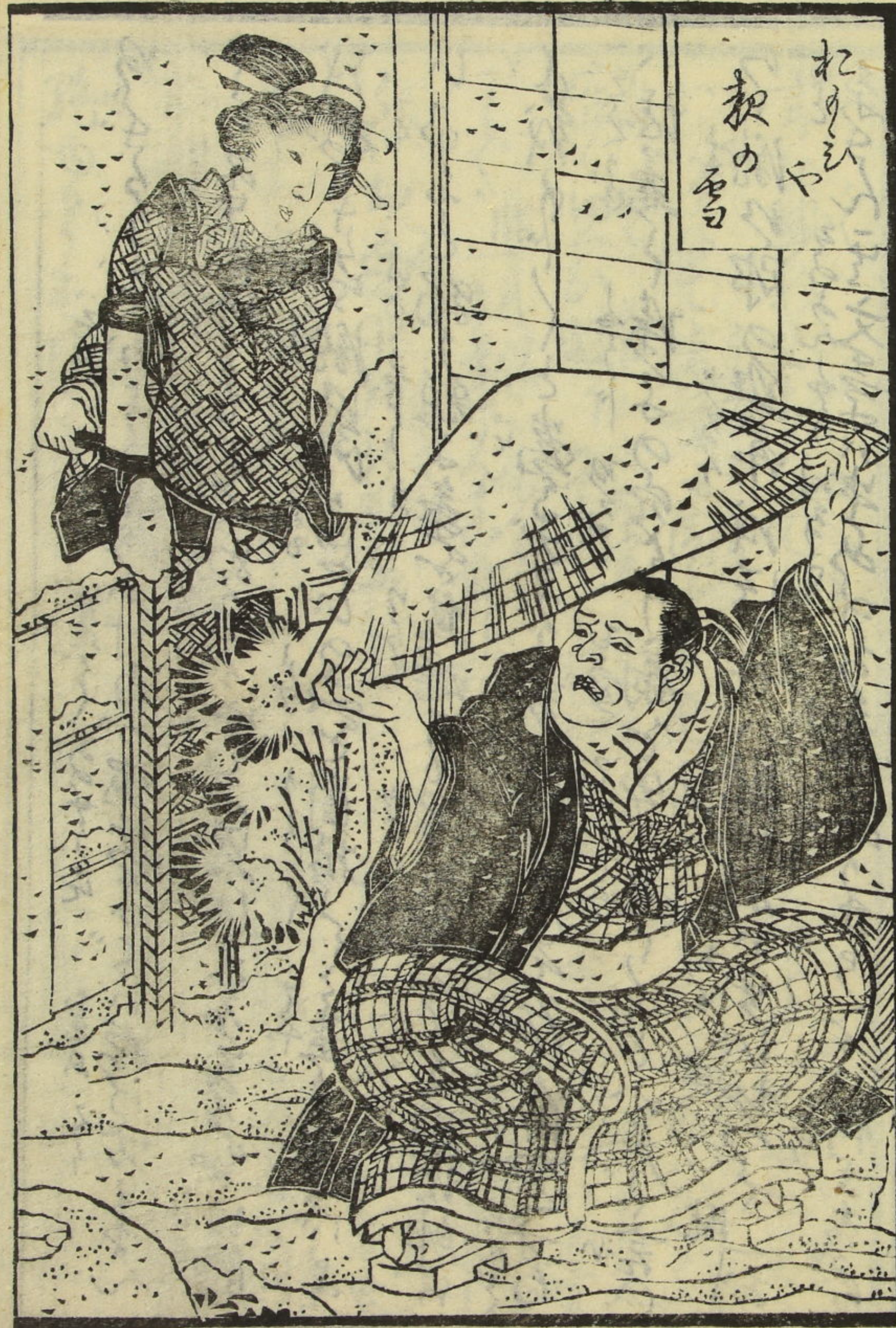
俗もその日の夕方子流次郎と守白の家律が方への
おさめい一間ふと出く「サ」流さん守白さんおさめい
足中多流うのおお知れ成と子エ雪がめんやう強くあつた
うらりあ一お出がるのと尻ららぐとお鳴を流ぐんぐんサ
とヨ 流ぐんぐんサ「ドレおんをあきい」流ぐんぐんサ

少い上高の出来りまきさうら行指う事ぬぐよおおんはぬ
て下さりとさうくごさうまき子正「とんご中をさぬ私
のいそんのつんきんへくおるものかおのつごりやあつら
中らう方のるへんぬおのきそはるのどごさういやはは「ホー
まお為るもすごめおれおれおれおれおれおれおれおれ
我彼をすて這て一服をぬぐつておれおれおれおれおれ
携へる果へのくくを踏さるをさる小声おれおれおれおれ
物の首尾の極妙ごごごごごごごごごごごごごごごごごご
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

建舟の来るいといぬへも新うい出来やせん何でもない
とおろくくうらごごごごごごごごごごごごごごごごごご
さらおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
あきい干上うまきごごごごごごごごごごごごごごごごご
ぬすし「とんご先ごごごごごごごごごごごごごごごごご
経方おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ
成すし「大体おれおれおれおれおれおれおれおれおれ
おれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれおれ

首尾と申すべしとて先承し候はらす寸一やお肉の
さんお亥指ぐごさいまをあらわしもお揃ひあくし申
うとら為入すし一まらるゝお巻が何り面白いお吐しは思ひ
かしくは思召のあいなちうは後しを指し申すら司や丈
い申寸白さん何かお願ひしうしすに下言書申す立の
ゆくみごまごまごと思へす白い頼み憐れ胸を為く速く
解きと知りしれども氣のおさすそのうつすは成り越せ
と離れ郎の美い女を祝しと地さく言めし申のふま

お申しい指し候はらす寸一とお肉の
おら候と申す白い思へすは思召のあいなちうは後しを指し申すら
れがまを申す寸一。エ。モシお嬢さん申すらわお身がお好ご
と申すは思召のあいなちうは後しを指し申すら
と新のふま申す候はらす寸一とお肉の
あそつと申すは思召のあいなちうは後しを指し申すら
お糸の例くさし申す寸一とお肉の
と申すは思召のあいなちうは後しを指し申すら



いさゝか入るの証も多し
細子ぞい今一晩か
少くもあがらば
まんまと揚り糸を
がけもあがらば
疑うそ
そん系所
のすい

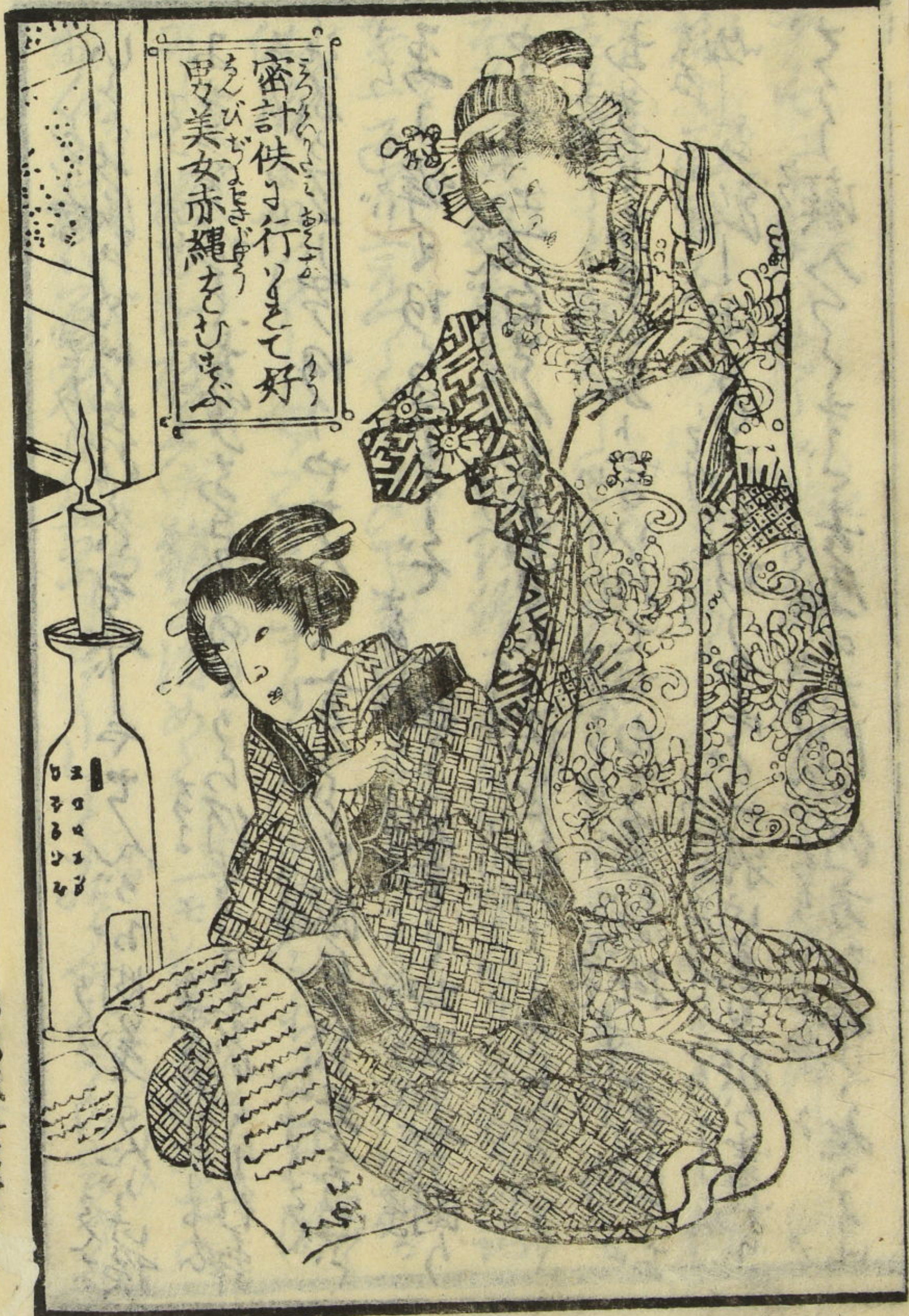
みりける

身百七面

然しかば寸すん白はくい無むい処ところとああみ小見こみられて須臾しゆん回へい答た
きき一いっ借かりりいいががききりりて決けつ面めん皮ひ生せいききああれれいい平へい氣きが
新あらたしくく「クヤヤおお肉にく炙いさんさんどどりり中ちゆう々々ろろ老らういい一寸いっすん小用せうよう
ここ中ちゆう々々いい知ちがが余ありり雪ゆきのの糸いと色いろががぬぬてて中ちゆう々々いい中ちゆう々々いい故こ心しん
とと泳えいめめくく中ちゆう々々いい「クヤヤ半はん公こう小使せうし場ばいいおお少せういいとといい
ヤヤ人にんヨヨううのの巾きん着ぎくくああききもも為なすす中ちゆう々々いい子こ五ご尺せきとと雪ゆきと

泳めろの不何を淳子へ穴我明く圃の中とお服き法飲の
どぶいすそく「イヤ多巻が常めく時ことせうとて話
とみややせんツイ鑑力の満が満了く「イヤく然るは
つてもお徳の抱いものどいどいせしやせんうと言ひれてそ
めそ流し郎お徳くらう中を重い半「イヤ鑑力でお
い扇子の解目が満了このくくへんご羅おと御中と
へ「ト間の悪そうお徳くくお徳お徳お徳お徳お徳お
から圃の并く遠みくくくくくくくくくくくくくくくくく

舞の唐紙捨つく右まおおおおおおおおおおおお
うそろうお徳あうお徳あうお徳あうお徳あうお徳あう
為るから杖之高いお徳の側にお徳お徳お徳お徳お徳
お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳
為るお徳く「寸白さんがト言つてさういふ話をお徳
「お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳
へお徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳お徳
「寸白く「何ぞは用どけい中をう子お徳ハイけお徳



まゝに両腕のお徳まゝいどの位子を頼む格のいれ流も
お新しきまゝのりすまゝからおれが御意成付もあつた
今迄作つたのがまゝ実あら春向改めく御後と言世
むゆふお成すは上宿る何とまゝをさる知悉せんが
そいおれが何れとも言ひあはれお談の整おせよ為
せせうりら流さん機嫌成せしかあるそ不々言成
お出しまゝのまよト言ふまゝうらはやくす白くせん計畧を
の圖の何れも一途路の面白くもるき茶の湯の位と

はるは平四、十

為し未もは御法が整へ一席の御れとまゝ御骨の
と理学の所を来ると後の裡少く病よ安を令めども今何
らぬ体もく改めをけし「ヤモウお肉の交さんお捌けくお牌
く実よ蘇生とやうふたれが許やと執色は沢を御意造
へお出しやとくく改めくお願ひまゝとぞとさひまぢら
さア若る那中も一寸おれをせ御すト言ひれく御意造
い面自あげよ「能く御意造」言ふ御意造
い中「アレサ言ふ」今おのりへお出ひは御意造

積りゆく言のまゝと致しすやうに交會も出来
おぼやうらおきさお室にお姫の熱いお口吞つ
くお披きと成す寸モシお披きとくは近うらど何
りゆそ子「おん小子エホー」ト是より金帝の建三の家
りておの余程至くは帳をくく西個の爲を御
くく立帰るは若あまの御孫をい惶はしくおし
宗伴が竊ふ妻ふらお討いく「宗」家よ今朝の都合と
りいおのの言なり「後番」道思つてさうい熱く出来

八月五日、十六

とせ「何ぞ」業能ういゆで何なりこト藤油語り
お畏まし「そ然い宗伴すむが互いの方便時合しと後
お二個が「お」代終が「這も」又下氷人の我まよ依を
野の爲もろ「実不可」実き「お」けり
その宗伴が「融」空の「成」候「解」み「を」あ「ふ」又甚
磨ある仔細ある「お」次「の」巻「を」着「て」知「らん

正史いろは文存巻之五十四終

